



「今もどんどん変わっているんですよ。生きることは学ぶことだし、学ぶことは変わることですから」

実は大熊さん、90年の世界大会では卵巣腫瘍を抱えながら競技に挑んだそう。なぜ

そこまで？ という問いに、大熊さんは笑顔で答えた。

「1分前には絶対に戻れないのだから、一瞬一瞬を後悔しないように生きなきゃ。私はいつ死んでもまったく悔いがない。毎日が命がけなんです」

主婦から世界チャンピオン

「大熊さんはだから誰だつて変わるんです」と言っ

「挑戦に違えることはない。ただ、自分を磨けるのは自分だけ。待っていても、他人は絶対に磨いてくれませんよ」



## PROFILE

おおくま ゆうじ

1952年、東京都生まれ。母が美容院のオーナーだったため、親孝行のつもりで、女子美術大学在学中に美容師資格を取得。2子出産後の30歳で美容技術に目覚め、世界最高峰とされる世界理美容技術選手権大会での3連覇など空前の受賞歴を誇る。

2002年、現代の巨匠、2004年黄綬褒章受章（株）ヴィーゼルインターナショナル代表。

# 職人の技

シリーズ 15 美容師

大熊祐子 さん

人生の転機は、いつどこに

あるかわからない。ごく普通の結婚をして二人の子供をもつけた、町美容師が、30歳を直前に心機一転、日本どこか世界一の美容師となつた。これは一人の女性の、変身と、そして一流職人の誕生と成長の物語である。

に飛び込みました」

「ここから大熊さんの人生はいきなりトップギアに入る。元々のデザインセンスに強い意欲が加わり、一気に才能が開花。組合の推薦で出場した都大会でいきなり準優勝したのを皮切りに、わずか数年のうちに、「美容界のオリンピック」、世界大会の代表へと駆け上がっていた。

「1990年の世界理美容技術選手権オランダ大会、40日前から現地で合宿をしたのですが、無心というのは、ああいう状態を言うんでしょうね。完全燃焼の毎日で、大会当日

のことは今でも細部までくきりと記憶しています」

無欲のチャレンジの結果は、なんと日本人初の総合優勝。さらに次の92年東京大会、そして94年のロンドン大会と、驚異の3連覇を達成。テクマックで頂点を極め、コングールから引退した後、彼女の技術はさらに深化する。

「技術というのは、テクマックだけじゃないんです。知識と組み合わせないと上達しません。そして知識を得るには、意識がないとだめなの。知りたい、良くなりたいたいという情熱がないと、進歩できない」

たとえば大熊さんは、手櫛

を入れるだけでゴゴゴの髪をサラサラに変えることができる。プローストという技術を体得している。まるで魔法のようだ。知識とテクマックを融合させて身につけた「職人技」なのだという。

「ヘアアーティストと云うけど、アートというのは作り手が自分の満足のためにやる行為。コングールはアートでもいいけれど、お店に出たら美容師はお客さまを相手にする職人です。職人は、お客さまの思いを形にしないとダメ。それには常に勉強ですよ」

どんな髪型でも作り上げられる圧倒的な技術を武器に、大熊さんは今、女性の人生そのものに向き合っている。

地味だった女性を明るく変身させ、その女性が所属する職場の雰囲気まで変えてしまつた例。「気弱だった娘が前向きになった」と親がお礼にきた例。大熊さんの技術によつて人生を変えた女性は多い。

「髪には、その人の人生が出来ます。すべての人は、その人にならない人生と品格を持つているんです。それを見つけて形にしてあげると、人は自信を持つことができる。自信を持つと、人生はすぐ変わる。私だっ

「ごく普通の『働くお母さん』だったんです。それが30歳を前にしたとき、ちよつと待つて私の人生、これで終わり？って思つたんですよ」  
おそらく多くの人が、人生で一度は感じる焦燥感。大熊さんは、この時初めて美容コンクールを見た。衝撃だった。「髪の毛でこんなことができるのかー」という驚きと、そんなことすら知らずにいた悔しさ。すぐに組合主催の勉強会

髪には、生き方が出る。  
髪を変えると、人生も変わります。



文 = 篠塚義成  
text: Yoshinari Shinozuka  
写真 = 林 泉  
photo: Izumi Hayashi